

子どもが危ないときを支える

津守 真



子どもは心身ともに傷つきやすく、一歩間違えばその存在がこわれてしまうかもしれない危なさをいつでも内に蔵している。このことをとくに気付かせてくれたのは、私の娘が第二子出産のために一家で私の家に滞在していたときのことであった。

子どもにとって「自分の家」の大切さ

丁度正月で三歳になったその子は、私共と以前から親しかったが、今回はいつになったら自分の家に

帰れるのか子どもには分からない程の長い滞在中、その子にとっては不安なことが多かったようである。体も心もよく動くその子は、大人のことをすぐに取り入れてペラペラしゃべるが、発音も不確かである。「ブッシュ大統領がね、お腹が痛くなったの」と、朝の食卓でまじめな顔をして言い、大人が笑うと一緒になって笑う。両親のみでなく、祖父母、叔母などが一緒に食卓を囲むから、どの人にどういう話題で話せばいいかと八方気を配りながら、その子

は大人の会話に参加しようとする。うっかり突き放したらことばをしゃべるのもやめてしまうのではな
いかとの危惧すら私共は感じた。一緒に寄り添って
長い時間を過ごしていると、その心は揺れ動いて不
安定で、いまにも崩れてしまいそうなことが分かる。

私共の家に来た翌日の夕方、私はこの子をつれて
郵便ポストに年賀状を出しにいった。はじめの道
にくると、「だっこ」を要求し、「おうちにかえろ
う」と言う。おうちと言っても、自分の家と祖父母
の家とがごちゃまぜになっているみたいであった。
家にもどるとすぐに、その子はトースターにつみき
をつめて、スイッチを回して焼き（もちろんコンセ
ントははずしてある）、つみきをひとつずつ皆に
配って歩いた。夕暮れの薄寒くなった気持ちをも、
トースターの遊びによって温めているように思え
た。一時的とはいえ自分の家を失った喪失の心を、
私共はどうやって温めてあげられるかを考えた。
トースターの遊びの後、この子は父親の腕に抱かれ

て眠った。

その後、この子は毎日一度、「自分のおうちに帰
る」と口に出した。それは泣いて主張するのではな
く、控え目に口にした。感受性の強いこの子は、
言ってもどうにもならないことを承知しているの
で、それだけに、馴れ親しんだ場所に対する思いの
深さが察せられた。

怒り易く泣き易いとき

私共の家に来た当初はとくに、この子は一寸した
ことで泣いたり怒ったりすることが激しかった。い
ろいろ書きとめられないくらいその連続だった。た
とえばコップに牛乳をいれてのみたいという。私が
牛乳パックを斜めにして注ごうとすると、私ではだ
めだ、お母さんでなければいやだという。母親がや
ろうとすると、自分でやろうとしていたのにと怒
る。よほど自分を正面から押し出して主張しなけれ
ば子どもは自分自身を支えきれないみたいであっ

た。無理難題がつづく、大人もつい怒りたくなるが、怒り易く泣き易いというのは、子どもの心の不安定さの表現であることが私共にはよく分かった。

場所のことだけではない。赤ん坊の出生についてもである。子どもは話では聞かされていても、赤ん坊とはどういうものなのかを体では分かっている。母親が入院するという異変がいつか起こるらしいとその子は感じているが、実際にはどうということなのかの体験もない。

食事のとき、排泄のとき、入浴のときなど日常生活の場面で、この子は無理を言い、自己主張し、大人を困らせた。そんなとき、私の妻は、「この子はいまにも倒れそうなんだから」と皆に言い、「力で勝つなんて下品なことをしてはいけない」と大人たちを励ました。そして私共はこの子が納得して次のステップに進むようにと努めた。子どものあやうさを支えるというのは、大人の側から一方的に押し切るのではなく、不安定さに揺れている子どもの心の

側に立つことである。大人になると、危ない時を自身で支えることが可能になるが、子どもは日常の中で大人に支えてもらわなければ、自分で自分を支えることがむずかしい。

第三者からみたら「わがまま」にさせていると見えるかもしれない。けれども私はいろいろの子どもの保育に何十年もふれてきて、もしかしたら崩れるかもしれない時を支えるのは、なりふりかまわずにその時の子どもの必要にこたえることを通してであると思う。それは決して「わがまま」にさせる結果になってはいないし、後になって何度も、そのようにしてよかったと思われている。

ワイングラスの遊び

何をしてあげても怒ったり泣いたり、困難な応答をつづけた後に、その子の内心を表現する遊びがあらわれることも、私がこれまで保育の中で何度も見

てきた通りである。

ある晩、夕食のあと、赤ちゃんの写真のついた「ベビーソープ」の洗剤の箱を見つけたその子は、それを流しに全部あけて泡を作って遊んだ。ひるま母親のお腹の上にとびおる遊びをして母親に叱られたとのことで、まだ見たことのない赤ん坊の存在に対する不安が「ベビーソープ」によって呼び起こされたのだろう。長い時間をかけて泡を作るうちに、その子は「かなしいよ」と言って、えんえん泣いた。

そのうちにふと戸棚の中のワイングラスに目がつまり、次々にそれをテーブルの上に並べた。私の家のワイングラスを九個全部出し終えると、次に、その子は、上等なコーヒー茶碗を十個全部出した。食卓のテーブルのへりに沿って丸く並べたときには、とても綺麗で、本人も私共も思わず見とれた。それからその子はソーサーを出してひとつずつワイングラスの下に敷き、それからコースターを置き、最後に上等な皿をワイングラスとコーヒー茶碗の上に重

ねた。皿、ワイングラス、コースター、ソーサーと四つの組が並んだ。外国の風景のプリントのコースターは、オーストリア、アメリカなどと言い、ポインセチアの絵のついたコースターは、メリークリスマスと言う。こういう遊びになると、いろんな辛いことがあっても、自分の本来の姿を発見したみたいで、この子はすっかり落ち着いてしまう。

こわれ易い上等なワイングラスをテーブルのへりに不安定に並べたときに、自分はこんなに不安定でこわれ易い状態にいるのをようやく支えているのだよと、この子は私共に対して表現しているように思えた。

更にもうひとつ付け加えるならば、この子は、切符とお金というように、何かを対にして揃えるのが好きである。描画も、小さな円をいくつも描き連ねるが、ひとつずつ名前を言いながらかいてゆく。線の動きを楽しむのではなく、描いた円と物を対応させる知的な関心で、この子どもの本質的な特長のひ

とつである。

養護学校の保育の場で

この年齢の子どもの不安定さと危うさを、この子のことで身をもって感じていたので、その時以来、私の学校の保育現場に出たとき、ひとりひとりの子どもに対する私の接し方が変わってきた。

数か月前に二番目の子どもを生んだひとりの母親が、四歳になる上の子を送ってきたとき、私はトランプボリンの上で子どもをおぶって跳びながら、「よくこの期間をもちこたえて過ごしましたね」と声をかけた。その母親は、「先生にもそのことが分かるようになりましたか」と言って笑った。この子は赤ん坊の授乳のときには傍で待っているが、終わると母親にはげしく抱かれたがるという。父親と出かけても、すぐに怒ったり泣いたりする。それで今日はベビーシッターを頼んで、母親が上の子を連れて来た。これからしばらくそうしてみようと思うと母親

は私に語った。親はいろいろな工夫していることが私には身に沁みて分かった。

同じ日に、もうひとりの子どもがひとりの職員と公園にいった。その子は公園にいくと行って外に出たのに、入口までくると別の方角にいたり、学校にもどってきても中に入りたがらず、また公園にきたがったり、公園ではどうしても服を脱ぎたがって大人を困らせ、その職員はへとへとになって帰ってきた。その職員の話によると、正月に母親と妹が実家にゆき、その子は父親と留守番をしていた。その間、あっちに行きたいと言ったり、怒り易く、父親を困らせたという。

子どもが怒り易く泣き易いとき、そして殊更に自分を主張し大人を困らせるチャンスを見つけようとしているとき、子どもの内心は寂しかったり、悲しかったり、不安定で、家庭でも、幼稚園・保育園・学校でも、特別に大人の支えを必要としているときである。

(愛育養護学校)